

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

ホームゲレンデで足慣らし

1月12日土曜日、信高山岳会の総会が乗鞍山麓で行われた。総会は午後4時から乗鞍山麓の鈴蘭高原の某所での開催だったが、せっかく鈴蘭まで登るのならばと、今シーズン最初の山スキーを計画、我がホームグラウンドで足慣らしをしてきた。

ゆっくりと朝食を済ませた後、8時半に家を出た。天気予報では晴れということだったが、意外とすっきりとせず高曇りである。しかし、視界は悪くなく山頂付近まで見通せた。ただし、上部は雪煙が上がり、いつもの通り風は強そうだ。リフトを3本乗り継ぎ、ゲレンデトップに着いたのは10時を少し回っていた。連休初日でもあり、正面の急斜面には2人が登っているのが見え、リフト脇でも二人組が今まさに登ろうと準備をしていた。

私も早速シールを装着と思いきや、間違えて違うスキーのシールを持ってきてしまったのに気づいた。山道具というものは、いろいろな場面に対応できるようにまた故障の際にも修理ができるように、ユニバーサルデザインであり、かつシンプルなのが重要である。その意味で、かつてはどのような道具も汎用性があったものだ。例えば一世を風靡した山スキー用ジブレッタのビンディングなどはその典型であり、生徒を山スキーに連れて行くには至極便利であった。しかし、道具は進化する。その流れの中で利便性を追求した結果、シールにしても、靴にしても、ビンディングにしてもすべてこの道具にはこの器具的な1対1対応になりつつあるのが昨今の趨勢である。したがって一昔前ならどんなスキーにもシールを合わせる事ができたものだが、スキーが違えばシールも変えるというのが今のスタイル。だから、シールが合わない・・・とはいうものの、せっかく来たのである。そこは山やの端くれ、何とか細工をし、シールを着けて歩き出した。ところが幅広の板に全面シールでないの、哀しいかな、登りだして最初の急斜面の最後の登りのトラバースで往生した。僅かな距離だが横滑りしてずり落ちる。やはり新しい道具は、技術を割り増ししてくれる物だと、古いシールの限界を知らされ先ほど書いたことと逆のことを思い知らされる。念のため持っていたクトーを装着し、20分ほどで最初の胸つき八丁を登りあげて、軽く1本とった。

ここを登ってしまえば、位ヶ原の斜面へとりつくまでは、しばらくはだらだらの登りが続く。程なくして先行していた2人にも追いつき、快調に登りあげていく。冬場も位ヶ原山荘が営業をしているので、思った以上に多くの人はいっているようだ。ここ数日はそれほど雪も降っていないらしく、その上ツアーコースにもなっているので、斜面は圧雪されゲレンデの延長のような斜面が続く。大きく左へカーブし、やや開けた場所に出ると正面に乗鞍山峰と高天ヶ原が望め、右後方には穂高の峰々も見えてきた。およそ1時間歩き、位ヶ原へ登りあげる直前の木陰で1本とっていると、「猛烈に風が吹いていたので、そこで断念しました」と一人のスキーヤーが下りてきた。見上げると、山頂付近は猛烈な雪煙が上がっている。樹林帯の中も場所によっては風が強くなってきた。

さあ、どこまで上られるか、気合いを入れて位ヶ原への登りにかかる。細いシールで

滑りながらも何とか位ヶ原に登りあげると、やはり猛烈な風が吹いていた。北アルプス北部は雪が多いが、こういう年は南の方は意外と少ないという。その通り、雪はあまり多くない。いつもなら完全に雪に埋もれている道路の側壁が見えており、ダケカンバの木もほとんど埋まっていない。時折吹く強風をやり過ぎしながら、徐々に高度を上げていく。大雪溪のバス停になっているトイレのわきを通り過ぎると、コロナの観測所が大きくなってくる。肩の小屋までと思ったが、とにかく風が強いでコルまで出るのは断念。12:35に小屋まであと標高差30mの地点でハイマツ帯に身を寄せるが、荒れ狂う強風の前に休むこともできない。身体を低くしてザックとスキーを飛ばされないように押さえながら、やっとのことでシールを外し、スキーをはきかえて、下りにかかった。

大斜面はコルから吹き降ろす風に背中を押され、風でカチンコチンに凍ったガラスのようなシュカブラの上をバタバタとスキーをあおられながら一気に下った。位ヶ原まで下ると、風の勢いは収まり、ようやく人心地。あとは樹林帯の中をそれなりに下った。13:40 ゲレンデトップに到着。振り返ると、さっきまでは曇っていた天気は回復して青空が急速に広がっていた。しかし、頂上は白い雪煙が高く舞い上がり「今日は誰にも頂上は踏ませない、またおいで」とでもいうかのように神々しく光っていた。

12年度 山岳総合センター講師研修会 その1

今年の山岳総合センターの講師研修会が19、20の両日開催された。今年も主任講師は国立登山研修所の東秀訓さん。東さんが担当して4年目になるが、今回は2日間の研修内容を①ビーコン・プローブ・スコープの操作法、②ビーコンを利用した捜索方法、③搬送技術の3点に焦点化し、絞った内容で行われた。参加者は32名。初日午前中は講義、午後はセンター前の大町公園に出て捜索のデモンストレーションと班別の研修を行い、夕刻からは再びセンター内に戻って班別協議という流れで研修した。捜索においては以下の流れに注意しながら初日のデモ、協議、2日目の実践という形で深めていった。

段階	内容	留意点
状況分析	雪崩のサイズの把握 遭難点・消失点の確認	救助に入っても安全かどうかの確認。
プライマリーサーチ	消失点から下方に向かって捜索する段階 ビーコン反応に気を配りながら目視で遺留品の確認	遺留品をしっかりと持ち上げ、遭難者がいないか確認し、捜索者全員で情報の共有。
セカンダリーサーチ	ビーコン反応が現れた地点から電波誘導法により埋没地点を絞り込む	ビーコン反応に気持ちが集中するので遺留品がないか、安全かなど広い認識を持つことが必要。
ファイナルサーチ	エリアを絞り込みビーコンを雪面に近づけてクロス法により埋没者の位置を特定	埋没が深い時は場所を絞り込めないで範囲を決めてプロービング。
埋没者の掘り出しと応急処置	プローブで埋没位置の特定をして掘り出しにかかる 呼吸空間の確保優先し、全身を掘り出す	ヒットしたプローブは抜かない。掘り出す時は低体温症・骨折などに注意を払う。

雪崩捜索の5段階と留意点